

## 大学生に対する自然体験プログラム別にみた効果についての研究 －CASE 学生環境サミットを事例として－

○横地佑典 [東京農業大学] 平田太良 [東京農業大学大学院]

△栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：学生環境サミット 自然体験 ラムサール条約登録湿地

現在、自然環境の保全および賢明な利用に向けた活動は国だけでなく、企業、NPO、市民など多様な主体が展開している。それらの活動の中でも、実際に自然とふれあう体験は問題点を知るきっかけを学ぶ有効な手段として、さまざまな自然体験プログラムが企画立案され実行されている。

学校教育等の一環で実施されるものとは異なって、大学生が自主的に1週間にわたって参加し、ラムサール条約登録湿地や周辺・流域の自然体験に基づいて環境保全に向けた提案を行ってきた「CASE 学生環境サミット」における活動では多くのプログラムを体験しているものの、どのプログラムが効果的なのか、また終了後により影響を与えているのかは分かっていない。そこで本研究では、過去3回実施された「CASE 学生環境サミット」参加者（参加後に社会人になった者も含め）を対象に悉皆調査を実施した。

## 北アルプス雲ノ平における登山道周辺の裸地化の変遷調査

○松本開地 [東京農業大学] △麻生恵 [東京農業大学] △下嶋聖 [東京農業大学]

キーワード：北アルプス、裸地化、植生復元、空中写真、衛星画像

昭和30年代前半、各地で登山人口が増加し、第一次登山ブームが訪れた。平成の時代に入り、中高年層を中心に日本各地の山岳地で再び登山人口が増加してきている。これら登山ブームを背景に、登山者の過度の踏みつけなどによる登山道周辺の裸地化が各地の山岳地帯で問題となっている。裸地化の多くは登山道周辺に生える植生の踏みつけから始まる。踏みつけはぬかるみなどで歩きにくい路面を「避けたい」、きれいな風景を「見たい」という登山者の思いや行動が原因である。本研究の対象地である北アルプス・雲ノ平においても同様の問題が生じている。そこで、本研究では踏圧による裸地化の拡大が傾斜角・斜面方位・地質によってどのような傾向があるのかを解析する。加えて、空中写真及び衛星画像を用いて、過去から現在に至るまでの裸地の拡大変遷を解析する。この2項目の解析により、裸地化の傾向・特徴を明らかにすることで、今後の植生復元の施工内容検討のための基礎データが得られる。また、踏みつけなどによる登山道周辺の裸地化をこれ以上引き起こさないためにも、今後は自然への負荷が少ない登山道のルート設定、敷き直しが求められる。裸地化の傾向・特徴のデータは、自然への負荷が少ない登山道のルート設定、敷き直しを考える上での基礎データにもなる。